平　晋一郎

環境について
みなさんもう一度真剣に考えてみませんか？

Save The Kikuchi River

ヤマソ

マソと言えば子どもの頃は赤黒い顔にブツブツと尖った硬いイボがあって、腹側が赤く体長が20センチもあるハエのような大きい魚をイメージしていたのですが、最近はそのようないかめしいヤマソはあまり見かけなくなりました。体長7～8センチくらいのヤマソは菊池川の本流、支流に群れをなして泳いでいます。

コイ目コイ科カワムツ属（学名Zacco temminckii）標準名はカワムツ。能登半島、天竜川以西の本州、四国、九州、朝鮮半島、中国、台湾などに分布します。菊池川、筑後川流域ではヤマソアカバエというし、琵琶湖周辺ではムツ、モツなどといいます。このあたりでは群れをなして泳いでいるときはシラハエもヤマソも一緒にしてハエまたはハヤと呼んでいます。ハヤというのはシラハエもヤマソも動きが速いことに由来しているようです。河川の中流から上流部に多い魚ですが、カワムツはオイカワより上流に多く、汚染されていない自然環境の多く残っているところを好んで集まっています。小川の岸の藪の下や、柳の下などに群れをなして住み、落ちてきた虫や流れてきた昆虫などを好んで食べます。非常に敏感で警戒心の強い魚だから、近づくとまたたくまに藪の下や石の下に隠れて見えなくなります。以前は竹竿に釣針とミミズをつけてそっと藪の下に投げ込むと意外と大きい顎の赤い雄のヤマソを釣り上げることがありました。

橋の上などから見るとシラハエとヤマソは見分けにくいのですが手に取って見るとヤマソは体側に大きな青みがかった帯状の線があり容易に区別できます。学名のZaccoは長崎にきていたドイツ人の医師シーボルトがヤマソ、シラハエなどを一緒にして雑魚と呼んでいたことによるもので、ヨーロッパにはザコ・テンミンチーという学名で紹介されています。雄が雌より大きく1年で5～6センチの成魚になりますが3年で15～16センチになり、大きいのは30センチ近いものも報告されています。今では少なくなりましたが、上流の小川の藪の下に潜んでいるものには20センチ前後の大物をみる場合があります。雄の婚姻色は非常に派手で、顎にブツブツの突起ができて頭部が赤黒くなり、頭部の下から腹側にかけて朱色に染まり背ビレも腹ビレも橙色に変わります。

藪の下でヤマソを釣るのは大変面白いのですが、むかしはハエ釣りにカガラシ釣りの上手な人がいて、ヤマソ釣りは一段格が下に見られていました。カガシラは腰の柔らかい5尺くらいの竿に馬の尻尾の毛をより合わせて作った道糸に小さな毛ばりを5～6本付けて、道糸は竿の長さの3～4倍と長くして、頭上で振り回しながら正面の水面にシュッと道糸と針を振り込むという方法で、かかったら宙に引き上げて、片手に持った2本の竹に縫い付けた袋で受け止め、すぐに次の動作に入るという大変高等な技術を必要とする釣り方です。この方法ではシラハエが沢山釣れます。どちらも甘露煮で美味しいのですがヤマソのほうが味が劣るという人もいます。

産卵期は5月中旬～8月下旬と長く、流れの緩やかな淵や浅瀬の砂利の中に産み付けます。飼育する場合は昆虫類、ミミズなど何でも食べますが、少々攻撃的なところがあるのである程度大きい水槽が必要です。

歴史調査の楽しみ方

日平城跡（ひびらじょうあと）29

大田幸博
（元・菊水町史編纂委員会副委員長）

復習の3回目です。今回は、北側派生尾根と東側派生尾根を取り上げます。

北側派生尾根は、花牟礼山（はなむれやま）の北東側山腹から突き出た小山で、「城山（しろやま）」と呼ばれており、麓に蜻浦（ほう）集落があります。このために、日平城跡の山頂（Ⅰ郭）に立つと、城山側の方向が死角になります。これは、城地として大きなダメージです。そこで、城山の山頂と尾根筋には、大幅な手を加えて、物見（ものみ）の場に仕上げてあります。

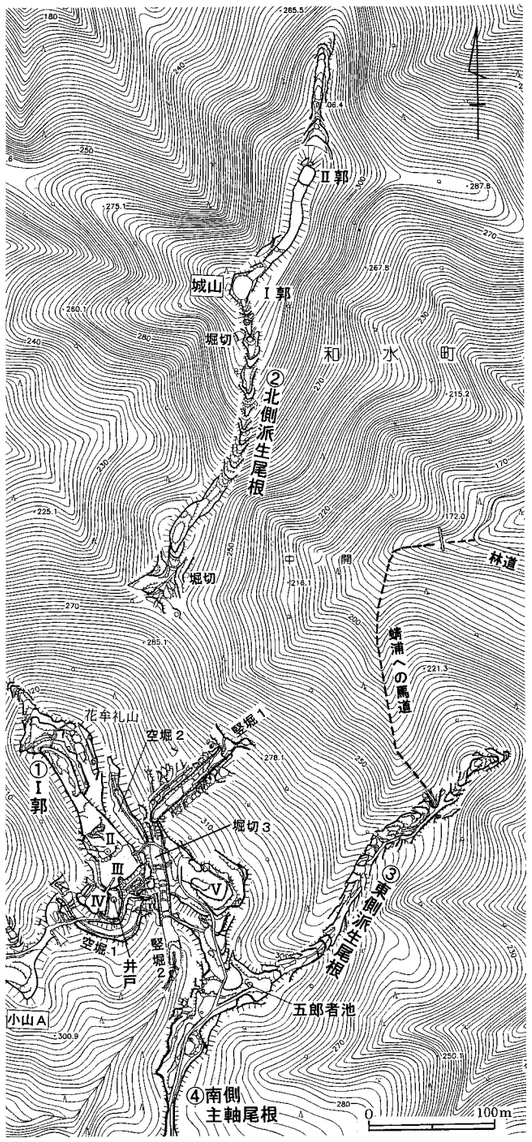
円形状の山頂（Ⅰ郭）は真っ平らで、周辺部も奇麗に縁取りされています。守備兵の詰め所などが建っていたと思われます。山頂の南側山腹（城地の本体側）は急峻ですが、それでも、念を入れて堀切（ほりきり）が刻まれています。尾根筋末端部のⅡ郭（第2の頂き）も平らで、北縁斜面は急峻に削り落されています。この地は、花牟礼山の飛び地で地形が非常に険しく、集落や城地Ⅰ郭からの往来も容易ではありません。しかし、死角を補うために、最大限の対策がなされている事が分かります。

東側派生尾根は、南側主軸尾根から蜻浦集落側へ穏やかに下っています。尾根筋に残る山道は、良好な馬道（うまみち）（馬による物資搬入路）と思われます。尾根の付け根に残る「（通称）五郎者池（ごろうじゃいけ）」の大穴には、「馬に水を飲ませた井戸」との言い伝えがあります。

今回、尾根の先端部を刻む堀切から先を歩いてみました。しかし、谷部へ入ると崩壊個所も数多く、しばしば行く手をはばまれました。それでも、何とか砂防ダム近くの林道に出る事ができました。しかし、そこから下位の道は、最終的に地形図での推測になりました。昭和43年に、蜻浦林道が通じたことで、人は馬道を通らなくなり、崩壊が急速に進んだものと思われます。

昨年の暮れに、両集落からの馬道を歩きましたが、蜻浦集落側が大手口（おおてぐち）で、日平集落側が搦め手（からめて）と推論しました。物資の搬入には、東側派生尾根を使った方が楽のようです。距離的に短く、馬の往来にも適しているようです。実際、蜻浦内の道路四差路に、「大城戸堂（おおきどどう）」と呼ばれるお堂があります。大城戸は、大手門に通じる呼称です。

さらに、両集落は、元来、一つの日平集落で、江戸時代の末期に、「蜻蛉村が日平村から分村した」という史実を知っておく必要があります。ですから、城時代には、日平集落の東麓が大手口で、西麓が搦め手であったとの表現もできるのです。すなわち、大手口と搦め手を考える時、今の地区名を冠に抱くのは意味の無いことになります。蜻浦城跡と呼ばない理由もお分かりになると思います。



日平城跡　北側派生尾根～東側派生尾根